
棲くう者と喚ぶ者

藤白竜胆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棲くう者と喚ぶ者

【Nコード】

N0125P

【作者名】

藤白竜胆

【あらすじ】

鈴の音の少女、耀の物語。

第二話となります。

一族の仕事は、なんだか厄介ですが…

彼女は蒼い館の前にいた。

時に呼ばれ、黄昏の者に惹き寄せられて。また、声がする。憎しい脚が、無意識に動く。

—しゃりんしゃりん。

—ちりん、りん、じゃり、りん。

音が鈍る。深く深く、耳の奥底を抉るような、漆黒の響き。

『宵卯の姫さま、どちらまで。』

彼女を呼ぶ声は、枯れかけたバリトン。力を込めて脚を留め、耀は振り返る。

『暁子の君、か？』

漆黒の霧から現われたのは、獅子。右耳を削がれた異形の頭。

『左様、茜にございます。このような処へ、何の御用で。』

獅子―茜は深くこうべを垂れると、その朱色の瞳で耀を覗き込む。当然といえよう、この館へは余程のことが無い限り近づいてはならない。

例え、地鎮めの一族であっても、だ。

『呼ばれてる、というのか…引き摺られる感覚があるのですよ。丁

度良かった、茜殿、何かお心当たりはございませんか？」
耀の問い掛けに、茜はグルルと一唸りすると、困ったように口を割った。

『仰せの通り、呼ぶ声が煩くなっております。おそらくは…子を呼び寄せる母親の思念かと。』

『子を母が喚ぶ、と？何故？』

苦虫を噛み潰したような顔をした彼女に、獅子は答える。

『眠りに就いてくれぬのです。子を想うあまり狂ったまま逝き、そのまま…地縛霊が如き執念が眠りを妨げる。』

『では、子を手元に置かぬ限り喚び続けるのですか。そいつは。なんて忌々しいことを…死者はひとりだと言つに。』

そう、死者はいつも一人。

傍に置きたい、傍に居たいと強く願うものであっても。その者とは、永遠に逢うことはない。

ましてや、我が子など…自殺であれば、炎獄に永久に閉じ込められる。もし、子が喚ぶ声に負けたならば？…なんて浅はかな事を…怒りに、体が震える。

『茜殿。その魂を眠らせることは出来ぬのですか。館の主人たる、貴殿ならば…』

『残念ながら、宵卯の姫様。私は目覚めの朝・暁を司る者です。眠りを司る、夕亥か…もしくは、宵の姫様。貴女様にしか出来ぬことでございます。』

『私か、結…。？茜殿、結はいづこに？』

ふと耀は、いつも茜の足元にまわりついている結が居ないことに気付く。

幼女の姿をした、可愛らしい黒き死者。

『それが…』

——ごうごうと、ただ。

音が反響しては消えてゆく。

『アアア…ウウ、ウ…どうシテ、ドウシテアノ子がイナイの。ワタシが、コロシたノニっ…！！アノ子はワタしのモノっ、渡サナイワタサナイっ！！』

結は、ただただ狂った靈魂を、静かに見つめている。群青の夕空色の瞳で。冷たく、つめたく。

『…結？』

この静寂そのものである筈の館で、滅多に聞くことの無いアルトの声。

結は無表情のまま、驚いた声音で振り返る。

『耀ねえさま？どおして此処に？』

結には、心の感情が無い。

声で表面の感情は窺い知れるが、心が死んでいるため表情が無い。

耀はそれを哀しげに一瞥すると、口を開く。

『なかなか戻らないと、茜が心配していたぞ。』

結は不思議そうに首を傾げると、また目線を件の靈魂に戻す。

——醜い色だな。耀は思う。

魂に実態はないが、オーラのような色合いがある。

固まりかけた血と腐った肉の混ざったような茶色、悲しみが怒りへ転じていく様の紫、憎しみが爆ぜる瞬間の紅……件の者の色は、大体この色で構成されていた。

禍々しい感情の、入り混じった色は。増幅するしか、術を持たない。

『耀ねえさま。夕亥は、見えない壁に阻まれて、これ以上近付けないのです。』

ぼつてりとした小さな唇から溜息が漏れる。

それもそのはずだろう。

夕亥は幼子の靈魂。肉体が無い分だけ障氣にやられやすく、自己防衛の呪がなければ、間違いなくこやつに呑み込まれているだろう。

耀は、もう一步を踏み出す。

——ばりっ。

『……っ。なんて狂気だ……』

鋭い痛み。腐敗臭。

電流が張り巡らされているような、弱き心の自己防衛。

——がしゃがつ、しゃ、じりん。

既に鈴の音は、鈴ではなく鉛の塊をぶつけ合わせたような厭な音を発している。質が悪い。

『結、言霊封じ…できるか?』

『耀ねえさま…まさか?』

結の声音が揺らいでいる。

無理もない。このような者ならば下手をすれば、霊魂を消滅させてしまいかもしれない。

『…死者の心は死んだときのまま動かない。正氣に戻るとは到底思えないが…やるしかないだろ。』

まるで人が変わってしまったかのように、耀は冷たく言い放つ。

——死後の救いの場があれば好いの、そう思えど、与えられない。

…生前のこの者は、沢山我慢を積み重ね、狂うほどに子を愛した。なれど、離縁したはずの子の父に取られそうになり、思いが爆ぜた。そして…子を殺めた。否、殺めようとした子が刃を奪おうとし、その反動で己の心月圧に一突き。それが、最期だった。

哀れなものだ。なれど、もう…

止めようが無い。

“瑠璃? 瑠璃。こっちへおいで。さあ…”

『はは、うえ…。』

幻影に縛られ、結は耳鳴りと頭痛を堪え、じっと時が過ぎるのを待っていた。

それは、永遠にも似た憂い。

鼻につく、香の匂い。艶やかな紅の唇。下弦の月。

『もう、お止めください…わたしは貴女のお人形じゃない、使い駒じゃない…』

それは過去の呪縛。

もう、幼い彼女には耐えられなかった。

“さあ、ホラ。どうしたっていうの？こっちへいらっしやいな。
私の可愛いお人形…可愛い可愛い青銅の子。”

——光がほとばしる。血のように鮮やかな、艶やかな紅。

静寂が広がる。

言霊封じは、成功したのだ。…制御を誤り、消滅させたこと以外は。

『ふえ…耀ねえさまっ…』

結の美しい紺碧の瞳から、涙が零れ落ちる。

『結…。』

酷だっただろう。

だが、今更何も出来はしない。間違いはしていないのだ、禁忌の言葉
を無限に吐きださんとす者は、消されるしかない。

猶予を与えんとした耀は、常に“あまい”と言われるのだから。一
族の掟は、冷酷にして正当。ゆえに、耀は異端なる者。

それでも…耀は結を慰めるように抱き締めた。

『戻れましたか。宵の姫。』

『…』

耀は黙りこくったまま、糸の切れた人形のように動かない結を横たえる。

『夕亥の能力を、ここからでも感じましたよ。』

茜は、さも当たり前のように言の葉を紡いでゆく。

凍ったままの耀の瞳を覗き込み、ニイと笑みを浮かべつつ。

『早う地鎮めの星司の名に相応しい方になられることを、お待ち申し上げております。宵の君。』

紅い瞳を優しく向けながら、茜は云った。

——その声には、温かさの欠片すら感じられなかった。

（後書き）

十 星司耀

（宵に属する卯年生の姫）

地鎮めの一族・星司家の跡取り娘。

十 茜

（暁に属する子年生の異形の獅子）

蒼い館のあるじにして、死者の霊魂の監視者。

十 結

（夕に属する亥年生の幼子）

茜の侍女の役割をする、呪使い。

ホラーっぽくしようと思ったのに。静か過ぎる。フツーだ。

07/03/14

以前、HPに掲載していたものです。

あらゆる哀しみを少しでも感じ取って頂ければ、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0125p/>

棲くう者と喚ぶ者

2010年11月20日01時05分発行